

THE GRANPHONIC CONCERT 5th

グランフォニック 第5回定期演奏会 ～歌、あるいは無辺への旅～

2003年10月26日（日）
16:30開場／17:00分開演
名古屋市芸術創造センター



THE GRANPHONIC CONCERT 5th ●プログラム

演出：齋藤 敏明
舞台監督：金子康雄
照明：石原福雄

1

男声合唱とピアノの為の さすらう若人の歌

作曲：Gustav Mahler
編曲：福永 陽一郎

1. Wenn mein Schatz Hochzeit macht
彼女の婚礼の日は
2. Ging heut' Morgen übers Feld
朝の野原を歩けば
3. Ich hab' ein glühend Messer
燃えるような短剣をもって
4. Die zwei blauen Augen von meinen Schatz
彼女の青い目が

指揮：成田 正人
ピアノ：早瀬 洋子
ドイツ語指導：Gundula Tumar
合唱：グランフォニック

2

男声合唱組曲 雨 より

作曲：多田 武彦
構成：なりた まさと

1. 雨の来る前
2. 武蔵野の雨
3. 雨の日の遊動円木
4. 雨の日に見る
5. 雨

作詩：伊藤 整
作詩：大木 惇夫
作詩：大木 惇夫
作詩：大木 惇夫
作詩：八木 重吉

指揮：成田 正人
ピアノ：早瀬 洋子
朗読：富田 敏夫
合唱：グランフォニック

3

男声合唱による 瀧廉太郎 歌曲集

四季彩

作曲：瀧 廉太郎
編曲：向川原 慎一

- | | |
|-----------------|----------|
| 1. 荒磯 | 詩：徳川 光圀 |
| 2. 雪（組歌「四季」より） | 詩：中村 秋香 |
| 3. 朧月 | 作詞者 不詳 |
| 4. 花（組歌「四季」より） | 詩：武島 又次郎 |
| 5. 荒城の月 | 詩：土井 晩翠 |
| 6. 納涼（組歌「四季」より） | 詩：東 くめ |
| 7. 箱根八里 | 詩：鳥居 忱 |
| 8. 月 | 詩：瀧 廉太郎 |

指揮：向川原 慎一
ピアノ：早瀬 洋子
ソプラノ：児玉 弘美
合唱：グランフォニック

4

合唱劇

玉照姫外伝～笠寺観音縁起より～

作：稲熊 裕之
補作：齋藤 敏明
振付：豊田 公子

1. プロローグ
2. 中将兼平登場
3. 娘との出会い
4. 宴
5. 玉照と兼平
6. すでに定められたごとく
7. 成高と女房の悪だくみ
8. 玉照の復活

指揮：向川原 慎一
ピアノ：早瀬 洋子
太鼓：横田 正広

キャスト：
玉照姫…藤田 桂子
観音様・成高の女房…内田 公仁子
中将兼平…成田 正人 グランフォニック
陰陽師…林 和宏
鳴海の長者太郎成高…黒田 泰男
長者の下女／おいち…公門 美佳
おつう…吉岡 恵美子 おさん…児玉和子
語り…三ツ松 平 新谷 岳史
伊藤 慎二 永井 一美

歌曲集《さすらう若人の歌》

Kennko

作曲者グスタフ・マーラー（1860-1911）のごく初期の作品です。交響曲第1番と同じ主題を使っているの、交響曲の本歌のように云われていますが、作曲年代やオーケストレーションの年代などを考え合わせると、かならずしもそうではなく、両者が平行して作られたと考えるべきでしょうか。

原曲は4曲から成る、歌曲集というよりミニシンフォニーともいべき形のオーケストラ付き歌曲で、恋に破れた若者を歌います。

*第1曲：愛しい人が嫁いでいく

昔の恋人のめでたい婚礼の日、

私は薄暗い部屋にこもって涙を流し、

沈んだ情けない日を送る。

青い花、野に歌う小鳥、自然は何と美しいか。

いや、もう歌うな、花も咲くな、

自分にとって春はもう過ぎ去った。

寝床につくとまた悲しみがこみ上げてくる。

*第2曲：今朝、野を行くと

今朝、草原を行くと、草の露が、釣鐘草が、

楽しげに挨拶をする。

「元気ですか、この世はなんてすてきなんだろうね」と。

世の全てのものが音と色を得て輝く、

花も鳥も、大きいもの小さいもの皆。

私の幸せも始まるというのか。

いや、いや。

私の人生に花が咲くなんていうことは決してない。

*第3曲：燃えるような短剣をもって

私は烈火のような短剣を懐に呑んでいる。

嗚呼、何という苦しみ。

これが全ての喜びや楽しみに深く突き刺さる。

しかし何という悪い思いつきなのか、

そいつは昼も夜も片時も休むことなく

自分にまわりつく。

空を見ればふたつの碧い目が

まだ私を見ているではないか。

黄色い枯れ草の野を行くと、

金の髪が風にそよぐのが見える。

夢から覚めれば

銀のように涼やかな笑い声が聞こえてくる。

おお、何と耐え難いことだ。

私は、むしろ、

黒い棺に横たわって再び目覚めないことを、

どんなに願ったことか。

*第4曲：愛しい人の碧い瞳が

愛しい人のふたつの碧い瞳、

それが私を遠い世界へ追い立てた。

そのため、

美しく懐かしい故郷に別れを告げることになった。

ああ、碧い瞳よ、なぜ私を見つめたのだ、

私に残ったのは永遠の悩みと悲しみ。

静かな寂しい夜、

私は暗闇の荒野へあてもなく歩み出した。

別れの挨拶などだれも言ってくれない。

道連れは愛と悲しみ。

路傍に立つ菩提樹、

私はそこで初めて安らかな眠りに落ちた。

雪のように花を散らす菩提樹の下で、

私は世の仕打ちを忘れた。

全てのものが再び良くなった。

ああ、すべて、すべてが。

愛も悩みも、世の中も、夢も。

『雨』～大いなるチャレンジと三つの試み～

成田 正人

男声合唱組曲『雨』が生まれたのは昭和42年。同年に明治大学グリークラブが初演して以来、当時大発展期にあった大学合唱団を中心に、それこそ全国津浦々の男声合唱団が採り上げたと言ってよいほどの大ヒット作品です。

オリジナリティをモットーとするグランフォニックが、何故それほどポピュラーな曲を選んだのか。団員の中から「一度は多田作品を」という声が挙がったこともありますが、“学生たちの歌”というイメージの強いこの作品を、我々の年代でしかできない味付けで演奏してみようというチャレンジ精神（反骨精神？）が大きな要因です。

よく知られている上に無伴奏で書かれていますので、当団の実力がまざまざと露呈されることになり、指揮者にとっても大いにチャレンジ精神（被虐精神？）を要求される選曲ではあります。加えて、この組曲の紐帯とも言える4曲目の「十一月にふる雨」が、差別用語を含むという理由で別の曲に差し替えられていたため、団内で侃々諤々の議論を行った末に、結局4曲目を切り捨てる（旧版の曲も新たに編入された曲も使わない）ことにしました。

ストーリーの根幹をなすのは大木惇夫の3篇の詩です。大木は、明治28年4月18日広島市天満町の呉服商の息子として生まれ、日清戦争を反映してか軍一と名付けられました。しかし、父が事業に失敗し物心がつく頃には家は没落しておりました。17歳の時、2つ年上の川島慶子に初恋をしますが、プラトニックに終わっているようです。

私はこの組曲を、貧困や失恋や挫折による憂愁に染まった大木の詩を骨格とした、“魂の救済”ストーリーとし

て捉えることにしました。様々な人生を歩み続けて来たグランフォニアンにとって、そこにこそ採り上げる意味があると考えたのです。そして、グランフォニックらしさ、つまりオリジナリティを出すために、本日の演奏には次の三つの試みが盛り込んであります。

一つは、組曲全体を通したストーリー性を重視して、曲間にイメージを補完する詩の朗読を挟んでみました。特に、割愛した「十一月に…」の問題のない数節をそのまま利用しました。もう一つは、これもストーリー性が途切れないよう、曲間を各曲のモチーフを使ってピアノで繋いでみました。三つ目は、時には西洋音楽の「拍」の概念を犠牲にしてでも、日本語の詩の持つ抑揚（＝語感）を優先してみました。

こうしたチャレンジや試みが、ご来聴の皆様にご受け容れて頂けたら至上の喜びです。

*「雨」のストーリー・イメージ

地上のすべてのものは慈雨を待ち望む。しかし荒涼とした武蔵野の原野に降る雨は、主人公の暗さを引き摺った心象を映し出す。本来楽しい遊具であるはずの遊動円木は、寂しく雨に濡れている。十一月の雨も冷たく悲しい。だが、この時主人公は一つの事実を意識下に収める。この雨はすべてのものに、高貴なものにも地を這うものにも、等しく降り注いでいる事実を。雨の日に見ると、ほの暗い中にザボンが輝いている。主人公の心はまだ暗く塞がれたままだが、その奥に何かが灯ったかのようなのである。雨に輝くザボンはぬくもりであろうか、微かな希望の光であろうか。やがて雨の音はしずかに彼の心奥に届いた。この時彼の魂は解き放たれる。もう少し生きてみよう、歩を前に進めてみよう、と。

今なをフレッシュな色彩感

Kenko

瀧廉太郎は今からちょうど100年前にわずか25歳という若さで世を去った音楽家です。そんな時代に創られた歌の数々が今でもよく知られ歌われているのはちょっと不思議な気もします。が、それは美しくわかりやすい日本語の詩を優れたヨーロッパ音楽の書法で作曲した、つまり、瀧の歌曲は明治という我が国西洋音楽の黎明期のものであるのに、習作的な稚拙さや外国の技法を意識するあまり大げさな感情表現に陥るといった弊が全くなく、当時の人々にとってとても新鮮に思われたものが今の世にもそのまま伝わっているということなのでしょう。

こんな瀧の歌曲のいくつかを選んでピアノ付き男声合唱に編曲し、我が国の季節、風景、心情を歌う組曲としました。

《荒磯》瀧晩年の作。昭和の初めになって発表、出版された。小さな曲の中に巧みな転調で、水戸大洗海岸の自然の一瞬を歌う。

《雪》《花》《納涼》《月》組歌「四季」全曲。1900年11月に、瀧が大きな抱負と自信をもって書いた芸術性の高い歌曲集。我が国の春夏秋冬を美しく詠んだ詩に、瀧は、混声合唱、女声合唱、独唱、ピアノ伴奏、ピアノとオルガンの伴奏等の様々な演奏形態を試みているが、その特殊な形態の所為なのか、優れた曲であるにもかかわらず全曲が演奏されることはほとんどない。

《雪》原曲はピアノとオルガン付きの混声合唱。一夜にして見慣れた風景が一変する雪という自然への畏怖、感動を歌った荘厳な宗教音楽とも呼ぶべき曲。

《花》原曲はメンデルスゾーンの無言歌を想わせる優美でぱりとした前奏に始まる女声二重唱。花盛りの大川堤と川面を行き交う 船人たち。春宵一刻値千金。

《納涼》原曲はギャロップ風、時にドラマティックな表情を見せるピアノにのって表情豊かな旋律が歌われる独唱曲。暑かった昼の陽も沈み潮風が吹く夏の日暮れの海辺、ああ、夕涼みっていいな。

《月》原曲は無伴奏混声四部合唱。短い曲だが転調や広い音域を用いた本格的な作り。秋の月を見てもの思う人。鳴く虫もものを想うことがあるのだろうか。もののあわれの世界。

《朧月》これは瀧の作品ではない。原曲の作詞作曲者も不明だが、瀧はこの曲に伴奏のスケッチを残している。暮れゆかないと思っている空にもいつの間にか朧月が懸かる。懐かしい春の風景。

《荒城の月》《箱根八里》は、《豊太閤》と共に中学唱歌として応募したもの。瀧は応募した3曲全てが採用となったが、この明治34年当時200余曲の作品が寄せられたというのも驚き。

《荒城の月》詩人のもつ仙台青葉城址と瀧の大分竹田城址の印象が一つになった名曲。悲哀感がにじむのは後年の山田耕柞の編曲のため。原曲はもう少し雄渾な印象。

《箱根八里》中国の故事を引いた物語風の詩、変化に富んだ自由な形式で躍動感、高揚感、大団円と歌って面白く聴いて満足な傑作。

兼平・玉照姫伝説の根底に流れるもの

稲熊 裕之

平安中期の歴史物語「大鏡」太政大臣基経の中に藤原兼平公に関する記述が見られます。(口語訳を引用します。(出典：小学館「日本古典文学全集」))

「三男にあたられる方は、従三位になられ、宮内卿兼平の君と申していましたが、お亡くなりになってしまいました。じつは、この方の御母君は、式部卿忠良親王の御女でいらっしゃり、たいそう尊いご身分にご出世なされるはずでしたがなあ。」

関白藤原基経公には4人の息子がいましたが、兼平公だけが異母兄弟。しかも当時は、血筋が何よりものをいう閥閥社会でしたから、地方の国司の娘を正室に迎えるなんてことは、スキャンダル以外の何ものでもなかったでしょう。「大鏡」の作者は、他の3兄弟、時平・仲平・忠平にはわざわざ章を設けて書いているのに、兼平公については上記の記述があるだけというのは、母親が違うという理由ばかりではないのかもしれない。

ですが、出世コースをドロップ・アウトしてまで玉照姫との愛を貫くことを決意したことによって、かえって私に兼平公の人となりを強くイメージさせるのでした。

物語の時代は9世紀の終わり頃。あの世のものとこの世のものが共存していた時代です。仏教の世界観に支配されていた時代でもあります。でも、だからといって田舎の娘が土砂降りの雨の中で、自分の笠を雨曝しの観音像に被せたぐらいで、当時最高の権力を持った為政者の三男坊が嫁にしようと思うのでしょうか。何

かもっと強い縁—いわゆる赤い糸—で結ばれていたのではないか。或いは、玉照姫に強い癒しの力が備わっていたのではないか。単なるシンデレラ・ストーリーだったら、千年以上の時を経て語り継がれることはなかったでしょう。この伝説の根底にあるものにイメージを膨らませながら、演出の齋藤先生のお力添えも得て、台本を書き上げました。

ところで、グランフォニックのオリジナル合唱劇には一つの鉄則があります。それは「コーラスが主役になること」。すでに4作品を書かれたなりたまさと氏も毎回このことで悩んでおられました。私も然り。初稿の台本には、玉照姫がいじめられるシーンや、観音像に笠を被せるシーンを書いたのですが、ストーリー展開が玉照姫中心になるという指摘を受けて書き直しました。つまり、この作品は兼平公の側から見た玉照姫の物語です。(笠寺縁起をはじめ、もともとの伝説が玉照姫を中心にして書かれているのを兼平公中心の物語に書き換えたということで、タイトルにあえて「外伝」と付けました。)

作曲については、自分がこれまで積み上げてきたオペラ・ミュージカル体験を出し尽くしました。(Top Tenorの伊藤高潤さんのお嬢さんで、国立音大作曲科出身の奈菜子さんにはずいぶん助言や勇気を与えていただきました。)

構想から作曲の完成まではほぼ2年かかりました。この間に国の内外では悲しい事件が相次ぎました。今なお玉照姫が受けたのと同じ苦しみに喘いでいる人々がいます。

作家の良心として、そのことへの思いも私なりに書き込みました。

THE GRANPHONIC CONCERT 5th ●プロフィール

齋藤 敏明：演出

1960年生まれ。名古屋大学建築学科中退。在学中に、名古屋大学学生劇団「新生」にて演劇を始める。

以後、劇団「PH-7」、劇団「ケプラー40-0」(主宰)を経て、1990年「オフィス ヴィ・コレクション」設立。1994年解消後、現在はフリーの演出家として、名古屋を中心に活躍。数々のプロデュース公演、いくつかの他劇団演出、市民参加劇、ミュージカル、オペラ、ステージイベントなど、幅広い分野にわたって脚本、構成、演出を手掛ける。

ワンシーン、ワンシーンの絵作り、ステージ構成などには定評があり、最近では分野の異なるアーティストによるジョイントステージの構成・演出も手掛け好評を得ている。日本演出者協会会員。

豊田 公子：振付

豊田公子ジャズダンススタジオ主宰。

藤田桂子：ソプラノ

愛知県立芸術大学音楽学部声楽専攻卒業。同大学院修了。

NHKFM出演。オペラでは「ヘンゼルとグレーテル」「魔笛」「修道女アンジェリカ」「バステアンとバステイエンヌ」「こうもり」「ヘルプヘルプグロボリンクス」他に出演。

歌曲によるコンサート、ピアノとのジョイントリサイタル、ギターとのジョイントリサイタル等多数出演。また、おひさまいろのコンサートに於いて、森潤子作品の室内歌劇の初演に連続して出演する。

名古屋音楽学校、名古屋文化学園非常勤講師。名古屋二期会会員。

内田公仁子：ソプラノ

名古屋音楽大学卒業、同大学院終了。第21回読売中部新人演奏会に出演。アンジェロ(一宮)でのソロコンサートは12回を数える。

中島美鶴、小林史子、山田暢の各氏に師事。'99年から現在まで名古屋オペラセミナーにて松本重孝、牧村邦彦、河原廣之、揃洋子の各氏に学ぶ。

尾西第三中学校非常勤講師。女声コーラスマリアフローラ、Bel coro、枇杷島小PTAコーラスを指導。ヴィクトリア室内合唱団に所属。

児玉 弘美：ソプラノ

名古屋芸術大学音楽学部音楽教育学科卒業、同大学院音楽研究科声楽専攻修了。

グレーテル・ミカエラなどの役でオペラ、モーツァルト・フォーレなどの宗教曲のソリストに出演。平成10・14年度にリサイタルを開催。第16回「新進演奏家紹介コンサート」オーディションにて最優秀賞を受賞する外、各種オーディション・コンテストで受賞。

名古屋芸術大学音楽学部音楽文化応用学科非常勤講師。

公門美佳：ダンス

3才よりクラシックバレエをはじめ。塚本洋子、川口節子、鬼頭衣子らに師事。2年間のベルギー留学にてバレエ、モダン、キャラクターダンスなどを学ぶ。

数多くのダンス公演にて活躍しているほか、長久手町文化の家で5年間講師をつとめるなど、指導にも力を入れている。名古屋市文化振興事業団主催公演、新国立劇場オペラ公演にダンサー、コーラスとして参加。

今回もはじける予定です。

吉岡恵美子：ダンス

1993年ジャズダンスを始める。1995年よりスタジオMにてジャズダンスを小田昌世に師事。当スタジオより1996年米国ワシントンDCにてJDWCオープニングセレモニー参加。1999年名古屋市文化事業団主催公演『かるめん・じょんず』ダンサーで参加。

2003年3月N.Friens第1回発表会参加。

どれだけ日頃自分には無い色気が出せるか挑戦だがや！

兎玉和子：ダンス

1994年よりスタジオMにてジャズダンスを小田昌世に師事。当スタジオより1996年米国ワシントンDCにてJDWCオープニングセレモニー参加。

2003年3月N.Friens第1回発表会参加。

こんな機会はないので酔いしれながら頑張りたいと思います。うっとり...

早瀬 洋子：ピアノ

愛知教育大学音楽科卒業、同大学院修了。在学中より伴奏者として活動を開始、以来、名古屋二期会をはじめ、名古屋オペラ協会、三重県オペラ協会、名古屋市文化振興事業団、愛知県文化振興事業団、岐阜県産業文化振興事業団、長久手オペラレクチャーコンサート、などの公演に多数携わる。

また、若手声楽家の会の音楽監督兼全曲伴奏者として4回のコンサートを開催。

現在、愛知教育大学非常勤講師。

稲熊裕之：作・構成

同志社大学文学部卒業。グリークラブに所属し、故福永陽一郎氏の指導を受ける。氏の影響の下に、編曲を手がけるようになり、今日に至る。

第9回東西四大学OB合唱団演奏会の合同演奏で自身の編曲による「熱き心に」を指揮、その後広く歌われるようになった。01年5月に韓国開慶市で行われた韓日親善演奏会では、ソウルオリンピックのテーマ曲「Hand in Hand」を合同演奏曲として編曲・指揮した。

向川原慎一：編曲・指揮

名古屋市出身。早稲田大学第一政治経済学部卒業。中学・高校時代からの男声合唱を皮切りに大学のグリークラブではパートリーダーと学生指揮者を務め、その後も多くの合唱団で指揮や演奏に多くの経験を重ねながら、楽器メーカーの音楽教室関係の仕事を通じて和声法や音楽理論などを学び音楽への造詣を深める。

現在は会社経営の傍らグランフォニックをはじめとして女声コーラスやゴスペル講座の指導、および作編曲などの音楽活動が続けている。

小林研一郎氏に師事。

成田 正人（なりた まさと）：構成・指揮

慶應義塾大学ワグネル・ソサイエティー男声合唱団の学生指揮者を務め、卒業後も男声・女声・混声・器楽等様々な団体を指揮指導。また、「なりた まさと」の名で作曲・編曲や詩作等の創作活動が続け、「生きるということ」をテーマにした“音楽物語”形式の作品をシリーズで発表。代表作に『子犬のチロの物語』『パパの子守歌』『絵描きと少年』『不破白人の恋』『ブチ・ハラハの謎』『ハーネスで握手！』等々。

昨年9月にはコンマス田中良夫氏とドイツのフランクフルトでデュオ・コンサートを開催。今回は作曲者「なりた まさと」を封印し、『玉照姫』で役者に挑戦する。

グランフォニック

今から9年前、「東西4大学OB合唱団東海」として誕生した当合唱団は、2000年10月に「グランフォニック」と改称し、四回の定期演奏会を柱に、韓国演奏旅行やオペラ等への出演、他団体とのジョイントコンサート等、いろいろな活動を展開してまいりました。現在は約50名の団員で、週一回の定期練習と月一回の強化練習を行っています。

わが団は、「グランフォニック商事」というバーチャルカンパニーの形態で経営されています。経営理念は「歌を通じて生きる喜びを感じ、伝えること」であり、経営方針として「より高度な水準の男声合唱を目指す」こと、「創作・編曲に限らずオリジナル作品を必ず発表する」こと、そして「ドイツ語（または他の外国語も含めて）の曲をキチンと歌う」ことを掲げています。

全員営業本部に所属し、日々商品である「歌」の品質向上に努め、広く皆様に販売することで経営理念の実現に邁進してまいりました。営業範囲は地元名古屋圏に留まらず、関東・東京方面や遠くドイツにも拠点を置くまでになりました。当社の最大の特徴は、「副業」を許可していることであり、他社への出向・自営業・先生・農夫・「おじいちゃん」といったさまざまな仕事に全員が従事しています。従って、不足気味になるコミュニケーションを補うため、社内連絡から練習のMD録音による「副業多忙社員へのフォロー」など、「グランメール」というパソコン情報システムを最大限活用しています。

最近の大変厳しい経営環境の中、当社は更なる躍進のために、特に「品質の向上」そして「新規商品の開拓」に力を注いでまいりました。さらにはドイツ語の研鑽のため、独国グランフォニック商事社長・グンドウーラ女

史を再三本社に呼び、厳しい発音のチェックを行ってまいりました。

その集大成として、本日第五回目の定期演奏会（株主総会）を開催することになりました。お越しいただいた皆様とともに、歌を通して「生きる喜び」を感じ合いたいと思います。今後とも「グランフォニック商事」をよろしくご支援くださいますよう、社員一同心よりお願い申し上げます。

T1	佐々木正義	高橋 克	三ツ松 平
	池田 研一	伊藤 高潤	神谷 立正
	田中 良夫	鹿住 誠	向川原愼一
	片田 保彦	藤田 東一	

T2	吉居 清	柴田 道昭	飯田 公男
	森重 雅夫	三ツ口勝弥	石井 清
	伊東 健光	間瀬 譲	新谷 岳史
	佐藤 正	林 功	中村 嘉夫

B1	藤山 祐司	浅野憲一郎	小林 武久
	黒田 泰男	成田 正人	永井 一美
	神田 久嗣	弘瀬 嘉夫	長谷川利孝
	伊藤 愼二	細江太喜雄	寺島 正晃

B2	宮崎 嘉夫	伊藤 三作	古田 和則
	外村 俊夫	井ノ口貴敏	富田 敏夫
	浅井 良之	稲熊 裕之	篠 松次郎
	村井 襄介	林 和宏	松原 成憲
	浅田 宏		

多事総論

学生時代、伝統と実力を誇る早稲田大学グリークラブの劣等生として文字通り うんうんうなり続けた。私が属していたのはセカンドベース。パート練習はいかに音域を下げて太い声を出すかに終始したからだ。

言うまでもないが、セカンドベースとは世間で言うバスのこと。

当時、我がグリークラブ演奏会のアンコール曲の定番に「田舎のバス」というのがあった。

こちらは走り回っているバスなのだが、私達のバスは終始、走るバスのブーン、ブーンという擬音を発するだけで、ユーモラスなメロディを高音で歌い上げるのはファーストテナーの役目だ。

「縁の下の力持ち」とはこのこと。

こういう「辛酸をなめた」身としては、卒業してからはすっかり縁がなくなった合唱の世界に、終生付き合い続けて今日の演奏会にまで至った出演者の皆様には驚嘆とともに、心から敬意を表したい。

では、カラオケで歌も歌えなくなった音域の低下など、学生時代の体験を悔いているかと言えば、そうでもない。

おかげで、聴衆の皆様にはいささか申し訳ないことだが、合唱というのは聴いているより歌っているほうが何十倍も楽しいものだということを私は知っている。

外国に出かけて時間が空くと、私は教会を訪れてしばらく座っていることがよくある。ミサをやっている時などはしめたものである。異教徒である私が、通常は苦手な人が多い宗教音楽を味わい深く思えるというのもグリー経験が大きいと思う。

もともと「グリー」とは宗教用の男声四部合唱が語源だともいう。

グリー時代にやったグノーのミサ曲は、私のもっとも好きな曲のひとつだった。

音楽的才能が皆無に近いことを自己確認したのがグリー時代だったが、その代償作用と言うべきか。聴衆、観客として音楽に接することには今もって貪欲である。先日も、小室等さんに、「あなたの音楽好きは悪食に近い」と言われたばかり。

そういうわけで、近年までグリークラブに居たのは「出生の秘密」のように隠し続けていたのだが、もっと隠し続けたのは、瀧廉太郎が私の大叔父（母方の祖母の兄）であるという正真正銘の「出生の秘密」である。

この拙文を求められたのも、没後百年の今年、今日の演奏会でもその作品集が取り上げられていることが多少とも関係していると思う。

有名なわりには、私も含めてその全体像はきちんと掴みかねているのが、瀧廉太郎という存在ではないかと思ってきた。

有名、無名を問わず、その作品群を編み上げた「四季彩」の試みは、その意味でも、聴きものであるにちがいない。

筑紫哲也

THE GRANPHONIC CONCERT 5th

「グランフォニック」スタッフ

団長	三ツ松 平
幹事長	石井 清
副幹事長	新谷 岳史
庶務	黒田 泰男
会計	神谷 立正

音楽スタッフ

指揮者	向川原 愼一
	成田 正人

パートリーダー

T1	田中 良夫
T2	伊東 健光
B1	弘瀬 嘉夫
B2	浅井 良之
演出担当	森重 雅夫

合唱団へのご連絡は
(幹事長) 石井 清

〒468-0051

名古屋市天白区植田1-606-202

tel:052-806-8236

THE GRANFONIC
<http://www.granphonic.com>

THE GRANPHONIC CONCERT 5th

グランフォニック 第5回定期演奏会
～歌、あるいは無辺への旅～

stage1

男声合唱による 瀧廉太郎 歌曲集

[四季彩]

作曲：瀧廉太郎 編曲：向川原愼一

stage2

男声合唱とピアノの為の

[さすらう若人の歌]

作曲：グスタフ・マーラー

編曲：福永陽一郎

stage3

男声合唱組曲

[雨]より

作曲：多田武彦

stage4

合唱劇

[玉照姫外伝]

～笠寺観音縁起より～

作：稲熊裕之

補作：齋藤敏明

演出：齋藤敏明

指揮：向川原愼一

成田正人

ソプラノ：藤田桂子

児玉弘美

メゾソプラノ：内田公仁子

ピアノ：早瀬洋子

振付：豊田公子

2003年10月26日(日) 17:00開演
16:30開場

全席自由：2000円

お問い合わせ：石井 TEL・FAX：052(806)8236

名古屋市芸術創造センター

(地下鉄新栄町下車 北へ徒歩5分)

THE GRANPHONIC : <http://www.granphonic.com>